

**第34回 1月開催セミナー
日本語教育研究所**

日本語教育研究所では、現在、(1) 特定の言語を母語とする学習者のための日本語教育文法と(2) 日本語教育のための異文化間コミュニケーションについて研究しています。

戦後の日本語教育は、1962年に「外国人のための日本語教育学会」という名称で組織が発足してから、すでに50年あまり経過し、成熟期に入りました。しかし、それはあくまで教えられる対象言語である日本語という立場から見ての「成熟」であり、学習者の母語が異なれば、学習事情が大きく異なってきますが、この角度からの研究はまだ十分ではありません。上述の(1)は、まさにこの角度から、つまり、学習者の目線からの研究になります。

一方、異文化間コミュニケーションの研究は広いすそ野を持つものですが、本研究所では、日本語教育を行う上で最小限度必要な部分に限定して進めています。

**第35回 2月開催セミナー
高齢期健康総合研究センター**

高齢期健康総合研究センターは、リハビリテーションの専門職である理学療法専攻教員を研究組織の中心とし、医用工学、食品栄養学および社会福祉学の専門分野の研究員を交え、高齢者の生活機能の維持向上に役立つ研究調査を行なっています。65歳以上の方を高齢者と呼びますが、現在の日本ではいわゆる前期高齢者(65歳から74歳)の多くはお元気に過ごされています。一方、今後急増が予測されるのは、真の高齢者と呼ぶべき85歳以上人口です。私たちは、活動的な方々が健やかで質の高い生活機能を維持・向上し続けるための予防活動から、虚弱になられた方々に対する適切なプログラム、環境整備の方法まで、実践的・応用的研究を通じて、その成果を地域や病院・施設へ還元しています。

**第36回 3月開催セミナー
機能性有機材料開発研究センター**

関西圏には、機能性色素や高分子材料などの高機能な有機材料を製造・供給するものづくり中堅・中小企業の集積に加え、大手家電メーカーなど川下企業も多数立地しており、川上の製造企業と川下企業が摺り合わせしながら共に成長していく土壌が存在しています。本学はこれまでも、これらの企業との共同研究開発に取り組み、経済産業省の「戦略的基盤技術高度化支援事業」に、数多くのテーマが採択され、「高機能化学合成」技術分野の同事業に対して、指導的役割を果たしてきました。これらの実績を踏まえ、これら分野の中小企業とコンソーシアムを形成して、さらなる中小企業の高度化支援事業を推進するために、21世紀科学研究機構に「機能性有機材料開発研究センター」を設置し、これまでに同事業の14件の採択実績があります。

I-siteなんば

- 会場 大阪府立大学 アイサイト I-siteなんば
- 住所 大阪市浪速区敷津東2-1-4 1
南海なんば第1ビル 2F

(Zeppなんば大阪の東隣のビル北側の府大専用エントランスからお入りください)



- ・南海電鉄「なんば駅(中央出口)」下車、南へ約800m、徒歩約12分
- ・地下鉄御堂筋線「なんば駅(5号出口)」下車、南へ約1,000m、徒歩約15分
- ・地下鉄御堂筋線・四つ橋線「大国町駅(1番出口)」下車、東へ約450m、徒歩約7分
- ・地下鉄堺筋線「恵美須町駅(1-B出口)」下車、西へ約450m、徒歩約7分
- ・南海電鉄高野線「今宮戎駅」下車、北へ420m、徒歩約6分

※当施設には駐車場がございませんので公共交通機関をご利用ください

■お知らせ

**本連続セミナーは、4月から
リニューアルします。**



**大阪府立大学 21世紀科学研究機構
21世紀科学研究所連続セミナー**

2016年
1月~3月



大阪府立大学の「21世紀科学研究所」は、教育・研究活動の一層の活性化を図ることを目的に、バーチャル研究所として平成18年2月1日に創設しました。以来、教員が学域(学部)・研究科の枠組みを越えた学際的あるいは分野横断型の先駆的で挑戦的な活動をし、現在では44の研究所を擁するまでに発展してきました。

当セミナーは、各研究所の研究成果をより多くの皆さまに向けて情報発信し、活動内容を知っていただくことを願うとともに、社会への貢献に資することを目的として開催しております。多岐にわたる21世紀科学研究所の研究内容の一端をご理解たまわれれば幸いです。

講座のお申し込みについて

予約制(参加費無料) どなたでもお申し込みいただけます。

- E-mailもしくはFAXで、
- ①氏名(ふりがな) ②年齢
 - ③郵便番号・住所
 - ④電話番号
- ※FAXでお申し込みの場合FAX番号もご記入ください。
- ⑤参加希望の講座の開催月
- をご記入の上、下記へお申込みください。

FAX 072-254-8154
E-mail 21c-headoffice@21c.osakafu-u.ac.jp

定員70名。
定員になり次第締め切らせていただきます。



日本の「大学」は学校ではありません
— 日中ことばの「漢」ちがいを語る

日時 2016年1月7日(木) 15:00~16:30
 受講料 無料
 講師 日本語教育研究所 所長
 人間社会学研究科 教授 張 麟声(チョウ リンセイ)
 申込締切 2015年12月25日(金) ※定員になり次第締切

「大学」という単語を英訳すれば、universityかcollegeかになりますが、中国語に訳せば、発音は違っても、書き方はまったく同じ「大学」ということになります。「大学」という一単語に限らずに、日本語と中国語の間では、「世界」、「社会」、「国家」、「政府」、「警察」、「学校」などのように、たくさんの同形語を共有しています。しかし、形は同じでも、意味は必ずしもすべてが同じではありません。「日本」や「中国」といった固有名詞のように、意味がまったく同じのものもありますが、意味の一部がずれたり、あるいは、完全に違ったりしてしまうケースもたくさん見られます。この講座では、そのずれているケースや、違っているケースを取り上げ、楽しく解説させていただきます。タイトルを「日本の「大学」は学校ではありません—日中ことばの「漢」ちがいを語る」としていますが、どうして「日本の大学が学校ではない」かを、当日中国語と絡んでお話しします。



『酒仙と酒の妙味を語る張麟声』

◇研究紹介◇
 最近には主に、「日本語の典型的特徴と独特の特徴の研究」、及び、「中国語話者のための日本語教育研究」を行っています。「典型的特徴」とはあるグループのメンバー全員が持つ特徴で、独特の特徴はグループの中の一個体しか持たない特徴なのです。また、中国語話者のための日本語教育研究は、日本語を勉強する際に起きる学習者の母語である中国語のいいこと・悪いことを研究するものです。

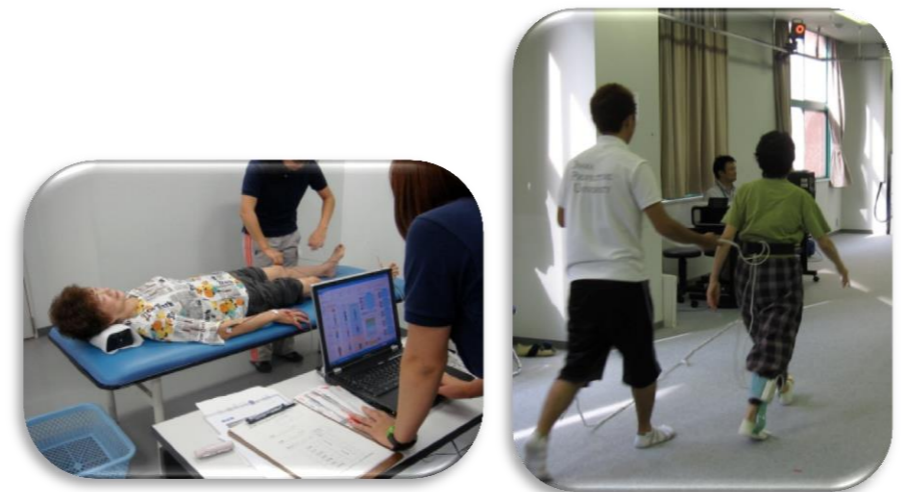


<講師略歴>
 多くの政治家も多くの民衆も心から日中友好を口にしていた1970年代に、レベル的に京大に相当する中国の復旦大学に入り、日本語を専攻しました。中国では大学院という制度がまだなかった時代なので、大学を卒業すると、そのまま別の大学の教員になりました。そして、30代の後半に日本にやってきて、大阪大学で文学博士学位を取得するが、その後はそのまま残り、こちらの大学で日本語学や言語学を教えるようになりました。

シニア世代の身体の健康知識
— 「歩き」から分かること—

日時 2016年2月4日(木) 15:00~16:30
 受講料 無料
 講師 高齢期健康総合研究センター 所長
 総合リハビリテーション学研究科 教授 樋口 由美
 申込締切 2016年1月29日(金) ※定員になり次第締切

「リハビリテーション」は、後療法的な位置づけとして発展してきました。しかし今日では、介護予防の中に見られるように「未然に防ぐ」医療としても期待されています。この講座では、健康維持のために「歩く機能」がいかに重要であるかを、リハビリテーション学的見地から解説します。生理機能の低下は40歳代から始まりますが、70代、80代に顕著になる様々な機能低下の前兆が、「歩き」の中に現れることがわかってきました。歩行は、生命予後や日常生活の動作と関連するだけでなく、認知機能をも反映する重要で簡便な健康指標なのです。残念ながら要介護状態になった場合には、適切な支援が急務です。特に軽度な介護状態の方々に対する有効な集団運動プログラムや治療的レクリエーションを研究しており、その成果をお伝えします。



<講師略歴>
 昭和43年岐阜県生まれ。筑波大学を卒業後、京都大学医療技術短期大学部にて理学療法を学ぶ。平成6年より大阪医科大学附属病院等で臨床経験を経た後、大阪医科大学大学院博士課程修了(医学博士)。大阪府立看護大学助手等を経て、平成21年大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科准教授、平成26年より現職。大阪府高齢者介護予防事業評価専門部会委員など歴任。



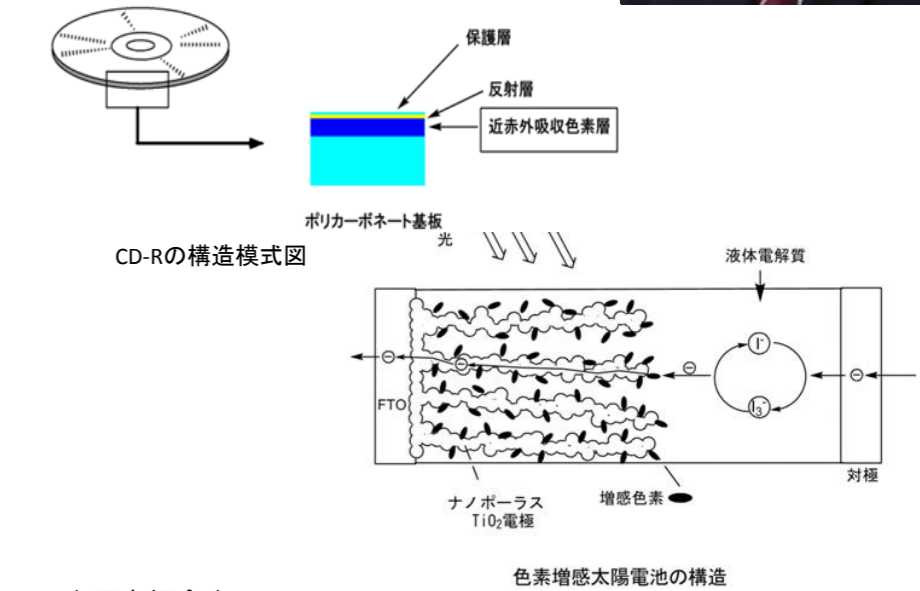
◇研究紹介◇
 人生の最期まで自立した生活を送るために、自身が気をつけて出来る有効なことは何か、機能が低下している予兆は何か、虚弱な状態になってしまった場合には、どのような手立てが有効なのか、それらに応えることが介護予防です。私たちは、高齢期における歩行の意義を分析し、あらゆる層の高齢者に応じたプログラムを示すことをテーマにしています。

色素の機能と先端技術の中の
いろいろな用途

日時 2016年3月3日(木) 15:00~16:30
 受講料 無料
 講師 機能性有機材料開発研究センター 所長
 工学研究科 教授 中澄 博行
 申込締切 2016年2月26日(金) ※定員になり次第締切

エレクトロニクス関連技術の進歩、特に情報記録やディスプレイ分野の急速な発展に伴い、機能性色素は機能化の重要な材料として利用されるようになりました。機能性色素が応用されている分野は、多岐にわたりますが、本講演では、実用化された例としてレーザーの光エネルギーを熱に変換する色素を記録層とする光ディスクCD-Rの紹介と本学と中小企業との間で実施しました「戦略的基盤技術高度化支援事業」でのいくつかの実例成果について紹介します。特に、有機太陽電池や偏光フィルムに用いることができる新しい機能性色素について紹介します。有機太陽電池における課題は、高効率な光電変換のために、光電変換できる光の波長領域の拡大ですが、本講演では、色素増感太陽電池における長波長光領域の光電変換を目指した近赤外増感色素やバルクヘテロ接合型有機薄膜太陽電池における近赤外光領域で光電変換を示すp型半導体ポリマー結晶性材料について概説します。

<講師略歴>
 昭和48年3月大阪府立大学工学部卒業、大阪府立工業技術研究所を経て、昭和51年より大阪府立大学工学部助手、講師、助教授を経て、同大学院工学研究科応用化学分野教授 現在に至る。一般社団法人近畿化学協会理事、一般社団法人色材協会理事、経済産業省中小企業政策審議会経営支援部会技術小委員会および特定ものづくり基盤技術高度化指針見直し検討委員会委員などを歴任。



◇研究紹介◇
 有機色素は繊維を染色するためだけでなく、電子産業分野にも広く用いられています。可視光の光吸収という色素本来の機能に加え、光学的・電気化学的機能が先端材料の担い手として、注目されているからです。ディスプレイや光記録材料など先端の工業製品の性能を決定する部品として、「機能性色素」の開発研究を行っています。